

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、省略したところがあります。）

大きく言って、現代では「きちんとする」方向へといろんな改革が進んでいます。これは僕の意見ですが、それによって生活がより窮屈になっていると感じます。

きちんとする、ちゃんとしなければならぬ。すなわち、秩序化です。

秩序から外れるもの、だらしのないもの、逸脱を取り締まって、ルール通りにキレイに社会が動くようにしたい。企業では「*コンプライアンス」を意識するようになりました。のみならず、我々は個人の生活においても、広い意味でコンプライアンス的な意識を持つようになったというか、何かと文句を言われないようにビクビクする生き方になってきていないでしょうか。今よりも「雑」だった時代の習慣を切り捨てることが必要な面もあるでしょう。しかし①改革の刃は、自分たちを傷つけることにもなっていないでしょうか。

こうした現代の捉え方を、ここではごく大ざっぱに言うだけにします。じゃあ具体的にどういう問題があるかと例を挙げると、その例だけに注目して拒絶され——「それをきちんとするべきなのは当然だ」と問答無用の反発を受けて——、話を聞いてもらえないかもしれないからです。

ですから時代の大きな傾向として言います。現代は、いつそのの秩序化、クリーン化に向かっていて、そのときに、必ずしもルールに収まらないケース、ルールの境界線が問題となるような難しいケースが無視されることがしばしばである、と僕は考えています。何か問題が起きたときに再発防止策を立てるような場合、その問題の例外性や複雑さは無視され、一律に規制を増やす方向に行くのが常です。それが単純化なのです。②世界の細かな凹凸が、ブルドーザーで均なされてしまうのです。

物事をちゃんとしようという「良かれ」の意志は、個別具体的なものから目を逸らす方向に動いてはいないでしょうか。

そこで、現代思想なのです。

現代思想は、秩序を強化する動きへの警戒心を持ち、秩序からズレるもの、すなわち「差異」に注目する。それが今、人生の多様性を守るために必要だと思おうのです。

人間は A に、社会および自分自身を秩序化し、ノイズを排除して、純粹で正しいものを目指していくという道を歩んできました。そのなかで、二〇世紀の思想の特徴は、排除される余計なものをクリエイティブなものとして肯定したことです。

遡ると、その原点は一九世紀の*ニーチェの哲学にあります。ニーチェは『悲劇の誕生』において、「*ディオニソスのもの」という言い方で、荒ぶる逸脱のエネルギーをクリエイティブなものとして肯定しました。

逸脱にクリエイティブなものが宿るといふ考え方は、二〇世紀を通してポピュラーになりました。芸術家にはハチャメチャなところがある、みたいなイメージですね（それも「昭和的」になり、今では^aピンコウホウセイな人が好まれるのかもしれませんが）。

予定を超えて朝まで飲んでしまおうとか、突然「今から海に行くか」となってレンタカーでドライブに出かけてしまおうとか、そのくらいなら日常起こりうる軽い逸脱で、青春映画みたいな爽やかさです。「勢い」ですね。その一方で、最も極端には、犯罪という逸脱がある。では、激しい社会運動で、法的にギリギリであるような行動などはどうなのか。法の隙をつく狡猾な^{こうかつ}ビジネスはどうなのか。逸脱には実にさまざまな様態があります。考えてみてほしいのですが、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害は法によって遂行されたのであり、抵抗するには違法行為^レ逸脱が必要だったのです。

そもそも、ルールに則っている状態とはどういうことなのか。法的にセーフかアウトかというのは解釈が必要で、だから法曹の^{ほうそう}仕事があるのであって、ボタンを押したら答えが出るわけではありません。ここには、*ソール・クリプキというアメリカの哲学者が考えた「規則のパラドックス」という有名な問題が^bピンでいます。

僕は一九七八年生まれで、九〇年代から二〇〇〇年代にかけて精神形成をした人間なので、二〇世紀的なものをずっと背負っているのですが、デジタル・ネイティブの世代からすると、逸脱をポジティブに考えるというのは違和感があるかもしれません。

有名な「*盗んだバイクで走り出す」という歌詞がありますが、あれはかつて、^{がら}がんじ搦めの社会秩序の「外」に出ていくという^Bなイメージで捉えられていました。ところが今日では、「他人に迷惑をかけるなんてありえない」という捉え方がけっこう本気で言われているようです。そういう解釈は当初は冗談だったのですが。

今日では、秩序維持、安心・安全の確保が主な関心になっていて、以前のように「外」に向かつていく運動がそう単純には^{ことば}言祝がれなくなっています。

そういう状況に対して僕は、さまざまな管理を強化していくことで、誰も傷つかず、安心・安全に暮らせるといふのが本当にユートピアなのかという疑いを持ってもらいたいと思っています。というのも、それは戦時中のファシズムに似ているからです。

僕は祖父母が戦争を経験しているので、皆が一丸となってひとつの方向を向くことへの警戒心をギリギリ教えられてきた世代です。そうい

う昭和の記憶があるからこそ、一人の人間が逃げ延びられる可能性が倫理的につねに擁護されるべきだと考えるのです。犯罪の^c「ヨクシ」は必要だとしても、過剰な管理社会が広がることへの警戒は言わねばならないし、現代思想はまさにその点に関わっており、人が自由に生きることの困難について語っている思想だと思ふのです。

秩序をつくる思想はそれで必要です。しかし他方で、秩序から逃れる思想も必要だというダブルシステムで考えてもらいたいのです。

たとえば机の上がめちやくちやだったら気分が悪いわけで、整理整頓したい。ところが、知人のアーティストから聞いた話ですが、机の上がキッチリ整理整頓されすぎていると、絵が「硬く」なってしまう。なので、むしろいい加減にしているのだと。この感覚は僕にもわかります。人間が^Cにつくり出す秩序ではない、何かもつと^Dなノイズみたいなものがないと、思考が硬直化してしまいます。

僕は机の上に植物を置いています。植物は自然の秩序ですが、同時に、人間の言語的な秩序からは逃れる外部を示している。植物は思い通りに管理できません。勝手な方向に延び、増殖もする。そういう^③「他者」としての植物にとときどき目をやると、物事を言葉でがんじがらめにしようとしてしまう傾向に風穴を空けるような効果があります。

動物を飼うのもそうですね。他者が自分の管理欲望を攪乱かくらんすることに、むしろ人は安らぎを見出す。ここが逆説的なのです。すべてを管理しようとするほど、わずかな逸脱可能性が気になって不安に^d「カ」られるのです。むしろ秩序の攪乱を拒否しないことで不安は^e「シズ」まっていくな。だから人は恋愛をしたり、結婚したりもするのです。それは秩序をつくるためというより、攪乱要因とともに生きていくことが必要だからでしょう。

(中 略)

秩序からの逸脱というと、暴走する人を褒め称えているみたいに聞こえるかもしれませんが、ちよつとイメージを変えていただきたいのです。それは自分の秩序に従わない他者を迎え入れることを意味します。それにはトラブルがつきもので、人と人が傷つけ合うことがまったくないなんてことはありません。多かれ少なかれ、自分が乱される、あるいは自分が受動的な立場に置かれてしまうということにも人生の魅力はあるのです。

自分で自分の行動をきつちりコントロールでき、主体的・能動的であるべきだ、受け身になるのはよくない、という考え方が世間には強くあるし、自己啓発でもよく言われます。だけれど、我々は他者とともに生きている。他者に主導権があり、それに振り回されることがしばしば

ばある。そのことがイヤなようでもあり、そこにこそ楽しさがあるようでもある。この両義性が重要です。能動的であればよいというわけではないのです。かといって、受動的になりきってしまい、他人の言いなりになってしまうのはそれで困ったことです。だから、能動性と受動性についても、どちらがプラスでどちらがマイナスかということを単純に決定できないのです。

このように、能動性と受動性が互いを押し合いへし合いしながら、絡み^{から}合いながら展開されるグレイゾーンがあつて、^④そこ^④にこそ人生のリアリティがある。

(千葉雅也『現代思想入門』講談社現代新書)

*注 コンプライアンス＝要求や命令に従うこと。特に、企業が法令や社会規範を守ること。

ニーチェ||ドイツの哲学者(一八四四〜一九〇〇)。

ディオニュソス||ギリシア神話の豊穡^{ほうじょう}と酒の神。

ソール・クリプキ||アメリカの哲学者(一九四〇〜二〇二二)。

盗んだバイクで走りだす||尾崎豊(一九六五〜一九九二)が作詞作曲した『15の夜』の歌詞の一部。

問一 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A D に入る言葉として適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歴史的 イ 有機的 ウ 普遍的 エ 解放的 オ 人工的

問三 ——線部①「改革の刃は、自分たちを傷つける」とはどういうことですか、説明しなさい。

問四 ——線部②「世界の細かな凸凹が、ブルドーザーで均されてしまう」とはどういう意味ですか、わかりやすく説明しなさい。

問五 ——線部③「他者」としての植物」とは、植物が人間にとってどのような存在であると言っているのですか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の秩序から逸脱している植物は、言語に強く束縛されながら生きている人間の性質を相対的に示しうる存在である。
- イ 自然世界であるがままに生きている植物は、管理社会の中でストレスを抱えた人間に心安らぐ時間をもたらす存在である。
- ウ 生態系の維持に重要な役割を担う植物は、環境のあるべき姿を人間に示すと同時に共存のあり方を具現化する存在である。
- エ 人間の言葉が通じない植物は、理解しあえない存在との望ましいコミュニケーションのあり方を人間に示唆しうる存在である。
- オ 人間とは違い無欲である植物は、人間の管理欲望を露呈させて理想的な人間社会を築くきっかけを与えてくれる存在である。

問六 ——線部④「そこにこそ人生のリアリティがある」とはどういうことですか、本文全体の論旨を踏まえて説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、池のほとりに蛙のあまた集りていふやう、「あはれ生きとし生けるものの中に、^①人ほど羨ましきものはなし。われら、いかなればかかる生をうけて、^②手足をばそなへながら、水を泳ぐを能として、陸にあがりてはつくばひ居り、行く時も心のままに走り行くことかなはず、ただひよくひよくと跳ぶばかりにて早為はやわざもならず。いかにもして人のごとく立ちて行くならば良かるべし。いざや観音に願をかけて、立つことをいのらん」とて、観音堂にまゐりて、「願はくはわれらをあはれみ給ひ、せめて蛙の身なりとも、人のごとくに立ちて行くやうに守らせ給へ」と祈りける。^aまことの心ざしをあはれとおぼしめしけん、そのまま後ろの足にて立ちあがりけり。「所願成就したり」と、喜びて池に帰り、「^bさらば連れ立ちて歩いて見ん」とて、陸に立ち並び、後ろ足にて立ちて行けば、目が後ろになりて一足も向かふへ行かれず。先も見えねば危さ言ふばかりなし。「これにては何の用にも立たず。^③ただ元のごとく這ははせて給はれ」と祈りなほし侍りといへり。浮世房聞きて、「世間の人これらのたぐひに似たる事多し。とかく身のほどを知らざる故に、君を恨み世をかこつ者みなかくのごとし。蛙は、おのれ鳥獸にだにもあらず、虫のたぐひにして、人を羨み、立ちて行かんとすれども、生れつき人に似ず、^④目のつき所のあしければ、立ちて行くべきものにあらずと、身のほどを知らざる故なり。」

『浮世物語』による

問一 ―― 線部 a・b の本文における意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|--|---------------|--|
| | a | |
| | ┌───────────┐ | |
| | ア | 蛙たちは、心を込めて祈りさえすれば、観音は願いを聞き入れてくれるとでも思ったのだろうか |
| | イ | 観音は、ひたすら祈る蛙たちの態度に疑問を抱き、心の内を試してみようとでも思ったのだろうか |
| | ウ | 蛙たちは、不自由な生から逃れ、正当な権利を得ることができはずだとでも思ったのだろうか |
| | エ | 観音は、あまりに切実な蛙たちの願いに心打たれ、ぜひ叶えてやりたいとでも思ったのだろうか |
| | オ | 蛙たちは、自分たちの生き方をただ嘆くだけでは、何の変化も得られないとでも思ったのだろうか |
| | ア | 思い思いのところを歩こう |
| | イ | 泳ぐのをやめて一緒に歩こう |
| | ウ | さあ、並んで歩いてみよう |
| | エ | それなら歩くのはやめよう |
| | オ | 一緒に歩いてから別れよう |
| | b | |
| | └───────────┘ | |

問二 ―― 線部①とありますが、蛙たちが「羨まし」と言う、「人」の特徴を本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問三 ―― 線部②についての説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「手足を持っているおかげで」という意味で、「水中をうまく泳ぐことができる」に続いている。
- イ 「手足を持っているのに」という意味で、「水中を泳がなければならない」に続いている。
- ウ 「手足を持っているからこそ」という意味で、「水中でも陸でも過ごすことができる」という内容に続いている。
- エ 「手足を持っているのならば」という意味で、直接的には「陸の上では這いつくばっている必要はない」に係っている。
- オ 「手足を持っているにもかかわらず」という意味で、直接的には「陸の上では這いつくばっている」に係っている。

問四 ―― 線部③とありますが、「元のごとく」とは蛙たちがどのようなようであったことを言っているのですか、答えなさい。

問五 — 線部④とありますが、これはどのようなことを指しているのですか、五十字以内で説明しなさい。

問六 浮世房は、蛙と人にどのような共通点があると指摘しているのですか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の理想像を定めながらも、その実現に向けた手段を誤ってしまう点。
- イ 自分の身の程を知らずに不幸な境遇にあると嘆いて、大それた望みを抱く点。
- ウ 自分の願望を他者にも押し付けることで、周囲に不利益をもたらしてしまう点。
- エ 自分に備わっている性質に満足できず、常に変化を求めて失敗を繰り返す点。
- オ 自分に対する評価を気にするあまり、内面と行動との間に矛盾を生み出す点。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、訓点を省略したところがあります。)

*ほう 寵葱そう 与とも 太子ト 質*ち 於タラ 邯鄲トス*かん 謂たんニ 魏い 王ヒテ 曰ニ、「今ハク ① 一人言市有虎、

王ズル 信ヲ 之カト 乎。」 王ハク 曰ト、「否。」 二人言市有虎、王ズル 信ヲ 之ト 乎。」

王ハク 曰ハク、「寡人疑之矣。」 三人言市有虎、王ズル 信ヲ 之ト 乎。」 王ハク 曰ハク、「寡人疑之矣。」 三人言市有虎、王ズル 信ヲ 之ト 乎。」 王ハク 曰ハク、「寡人疑之矣。」

「寡人信之矣。」 寵葱曰、「夫市之無虎明矣。然而三人

言而成虎。今邯鄲去大梁也遠於市、而議臣者過於三

人矣。③ 願王察之矣。」 王曰、「寡人自為知。」 於是a 辭行。

而しかルニ 讒言*ざん 先至げん。後、太子罷質ま。果不得見タシテ。

(『戦国策』による)

*注 龐葱||魏の臣下の名。 質||人質となること。

邯鄲||趙の都。

寡人||わたくし。諸侯や君主の自称。

大梁||魏の都。

議臣||私(=龐葱)のことを批判する。

讒言||他人を陥れるための、事実を曲げた告げ口。

問一 —— 線部 a 「辞」・b 「果」の漢字の意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------------|---|----------|
| a | | b | |
| ア | 同行するのをやめて | ア | 思った通りに |
| イ | 王に別れの挨拶をして | イ | どうにもできず |
| ウ | 安堵の表情を浮かべて | ウ | 意外なことに |
| エ | 王の臣下の地位から退いて | エ | 様々な段階を経て |
| オ | 王に不信の念を抱いて | オ | 不都合なことに |

問二 —— 線部①は「一人市に虎有りと言はば」と読みます。これに従って返り点をつけなさい。(送り仮名は不要)

問三 —— 線部②はどういうことを言っているのですか、六十字以内で説明しなさい。

問四 —— 線部③の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 皇太子とともに邯鄲に行くことを妬む者が現れるのではないかと危惧した龐葱は、皇太子を守ることができるのは自分において他にないということ、魏王に信じ込ませようとしている。

イ 邯鄲に行った後、自分に關してつまらないことを言う者が現れるに違いないと思った龐葱は、そのような言葉に惑わされることなく、自分のことを信じてほしいと魏王に訴えている。

ウ 龐葱は、人が最も大切にするのは自分自身であり、そのためには王をも平気で騙す場合があると論しながら、自分が邯鄲に赴いた後は自分に代わる信頼できる臣下を得るべきだと魏王に進言している。

エ 龐葱は、皇太子を守ることが務めであるとは言え、遠く離れた邯鄲の地に行かねばならない自分のつらさを語りながら、任務終了後はすみやかに大梁に戻すよう働きかけてほしいと魏王に懇願している。

オ 自分が邯鄲に行くことで、魏の行く末に不安を抱いた龐葱は、君主に対しても臆することなく批判的な意見を述べるような者こそが真の忠臣であるということを魏王に伝えている。

問五 — 線部④について、以下の問いに答えなさい。

(1) この部分の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 龐葱の言葉を聞き入れ、自身で真実を見極めようと返答している。

イ 龐葱の言葉が理解できず、より丁寧に説明するよう求めている。

ウ 龐葱の言葉に疑念を抱き、自分で事の真偽を確かめようと述べている。

エ 龐葱の言葉をもっともだと判断し、彼を守ってやろうと答えている。

オ 龐葱の言葉に心を動かされ、王としての務めを果たそうと伝えている。

(2) このような発言をした王は、結局どのようなようになりましたか、三十字程度で答えなさい。